



日本の住宅技術と住宅産業

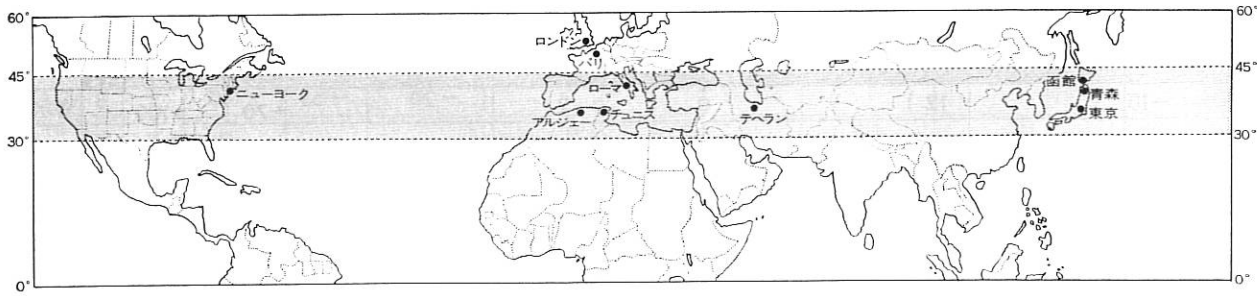
2.

住宅生産の合理化と固有文化

広瀬 鎌二

古代オリエントをはじめヨーロッパ文化の原点となつた国々、さらには流域に中国王朝の栄えた黄河などと同じように北緯30°から45°の間に位置するわが国は、温暖な気候と緑に恵まれており、必然的に他の地域とは異なる文化が生まれた。筆者はこのような観点から、発想のそれぞれ異なる日本と西欧の建築を比較し、わが国古来の住宅技術が環境への深い配慮とも関連していることに言及する。

建築技術 1977. 6
No. 310



2.1 自然環境と地域文化

日本は雨の多い国である。霧や霞や雲や雨は日本の風情そのものであろう。横山大観の名作「生々流転」は日本でなければ画材になることになかった代表的日本画であるし、驟雨に煙る紅葉の山村を画いた川合玉堂の、胸にせまる自然の美しさも、私達を感じるほどは外国人には理解できない情緒なのかもしれない。

世界地図を広げてみよう。日本はちょうど北緯30°と45°の間にピッタリはめ込まれている。同じ位置にあるヨーロッパの国は、ブルガリア・ユーゴスラビア・イタリア・フランスの南部にスペインなどで、それにアフリカ北部とトルコがはいり、また東京と同じ位置にある首都は、アルジェー、チュニス、テヘランといったところであろう。ニューヨークと青森がほぼ同じ位置でローマはさらに北の函館あたりにあるし、パリはもつと北に上がったかつてのカラフトの国境附近である。ロンドンとなるとはるかカムチャツカまで北上しなければならない。

若いとき、札幌に1年ほど住んだことがあり、この冬の厳しさを身をもつて体験したが、ヨーロッパの主要な国々はほとんどこの北海道よりさらに北に位置しているのであつて、私は特に寒さに弱くできているので、このときつくづく日本に生まれたことの幸運を有りがたく思つたものである。

周囲を暖流で囲まれ、気候温暖な日本ではあるが、同時に南は南方圏にはいる沖縄から北は北海道まで、緯度にして20°近く、位置としては地中海に面する北アフリカから南ヨーロッパまでを含む広範囲にまたがった国土

は、それぞれの地域で多様に変化する特有の気候風土を持つている。

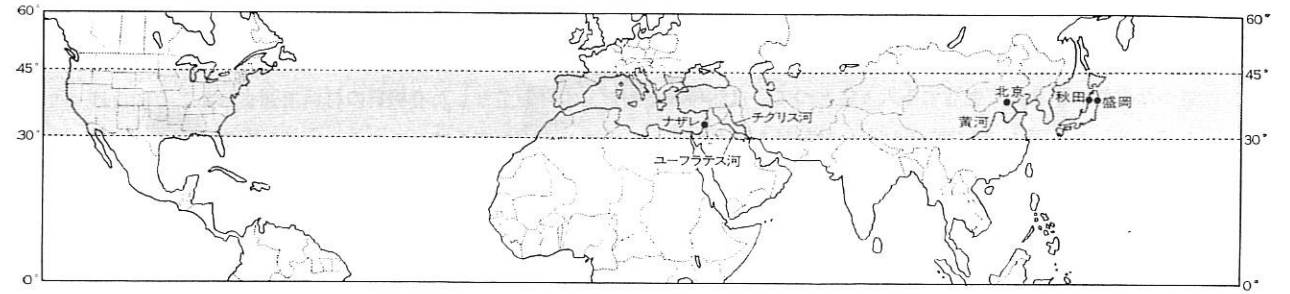
この土地にいつごろから人が住むようになったかはまだ明らかにされていないが、牛川人や三ヶ日人など化石人骨の発見で、およそ十万年くらい前には人がいたらしいとされている。

ところでこの牛川人や三ヶ日人が発見されたのは、いずれも浜名湖の周辺で、本州でも特に気候のいいところであるし、ネアンデルタール人の発掘で名高い北イスラエルのナザレ附近は、北緯34°あたりで北九州や四国とほぼ同じ位置にある。

さらに中国の化石人類である北京原人は、緯度で見ると秋田・盛岡と同じあたりに住んでいたわけで、原始人類がこんなにもそろつて日本と同じ緯度から発見されているのには偶然以上の意味があるのではないかと考えざるを得ない。

人類文明の発祥地が、チグリス、ユーフラテス河沿いの古代オリエントであつたといわれているが、ここも緯度が同じであるし、エジプト、ギリシャ、ローマと続く地中海沿岸に花咲いたヨーロッパ文化の原点となつた国々は、いうまでもなくこの北緯30°から45°の地域なのである。殷・周に始まる中国の王朝が、黄河流域の中原に覇を唱えることが王たる資格であつたことはよく知られているが、黄河は北緯30°から40°附近を流れている。

未開の人類が、住みよい土地を求めて集まり、人の集まるところに文明が興り文化が栄えるのは自然の成り行きである。自然といえば、この緯度に相当する地域は山岳地帯を別にして常緑広葉樹林帯といわれる、地球上で最



も温暖な気候に恵まれた緑の豊富な場所とされているし、なかでも日本は特に雨が多く周囲を暖流が取り巻き湿気があるので照葉樹林帯といわれる特殊な自然環境にある。これは地球上でもきわめて珍しい植生を持つた風土とされているから、ここに他の地域とは異なる文化が生まれても不思議はない。

異国の人間から見ると、われわれ日本人と彼等とはかなり異質の性格を持つた民族のように映るらしいが、それはこのように太古から世界でもまれな自然環境のなかで生活を営んできた習性を、大陸から分離して孤島となつてからはなおさら、独自の生活感覚として身につけてきた結果ではないだろうか。

湿潤で温暖な気候と、豊富な樹林に覆われ平地が少なく、入りくんだ巖（ひだ）の多い丘陵地帯のために水はけもよく、清水に恵まれた自然のなかで生活する人達が、堅穴住居以上の住宅形式を長い間必要としなかつたのは、むしろ当然ではなかつたろうか。人類の文明を模式的に考えるとき、私達はともすると日乾レンガに上下水道を備えた人工的な都市文明を、堅穴住居の集落より発達したものとしがちであるが、果してそうだろうか。

文明は必要によつて生まれ発達するものだとされている。文化が地域の環境と密接な関係を持つているとされるのも、そこの風土に生活する人間の対応の仕方が、それぞれに異なるからであることはいうまでもない。日本の国土が、地理的にも自然環境でも、この地球上で最も人類が住みやすい場所のひとつであるということが間違いないとすれば、人類発生以来数十万年はオーバーとしても、縄文文化に始まる堅穴住居は少なくとも1万年の

歴史を持つているとしてよいようだし、縄文早期の土器も、このころには使われていたのではないともいわれているわが国の文化が、インドやメソポタミヤのような人工の都市的生活施設を必要としなかつたために、こうした遺跡を持たないからといって、彼等のそれより未開であつたとはいえないのである。

いまは少なくなつたようであるが、以前には“西欧人の家は石造でありわが国は木造である。だから西欧文明のほうが優れている”という説をよく聞かされたが、経済的な貧富の差は別として、これは明らかに比較にならない文化論である。しかしこれに類する西欧先進文化論は、いまでも日本人の潜在的な観念のなかに根強く残つているのではないだろうか。

異なる尺度で測れば、その尺度で作られなかつたものは当然不良品として否定されるであろう。だからといって合格品にするために、その尺度で造り直さなければならない理由にはならない。メートル法を採用したからといって、すべての製品をメートルラウンドで作らなければならないという理由はないのと同様であり、某タレントの肩を持つわけではないが、メートル法よりはるかに長い歴史を持つた寸法のほうが、人間的な物の大きさを測る尺度としてはずっと使いやすいのであつて、建築寸法が3尺換算値の912mmを基準にしているなど、メートル法でははなはだしく使いにくい寸法が常用されている例は多い。

わが国の風土の特殊性が、西欧文化とは異質の文化を生んだという成因とその必然性を無視して、西欧的尺度によつて日本文化を測ろうとしたところに、今日の日本の

悲劇の要因があつたのではないだろうか。もともとこの両者は同一の尺度で比較すべきではなかつたのである。豊かな自然に囲まれて生活する人々にとって、自然環境の持つ絶妙な法則に、人智の及ばない神秘性を感じて、これに挑戦するより順応し同化する道を選んだのは賢明であつたといえよう。太陽神をはじめとして自然現象に人格を与え、自分達もまた自然の一部であると考えていた人達にとって、7世紀の進歩主義者中大兄（天智）が行なつた「作るはしから崩れる（書紀）」両槻（ふたつき）宮の巨大な石垣や、奈良盆地を縦断して飛鳥に至る大運河の建設は、自然を冒瀆する気遣い沙汰であつた。自然との共存が、日本人の生活構造を組み立てる基礎的ルールになつたのは、弥生時代農耕生活をはじめからとする説もあるが、この風土の特性から考えて、もつと以前の、定着して集落を営みはじめた縄文前期或いはそれよりさらに前のプレ土器時代には成立していたとするほうが自然であろう。それでもここに人類が生活をはじめてから10万年以上も経つていたのである。

厳しい自然条件の中で、土やレンガや石で生活を守らなければならない、水を得るためにも人工の施設を設けなければならないなかつた大陸の人達が、自然に抵抗するための技術を、やがて自然を征服するための技術に発達させていつたのとは、根本から文化の質を異にしているのであつて、むしろそんな技術を必要としなかつたほど、わが国の風土は恵まれた環境にあつたとすべきであろう。

もちろんわが国の国土のすべてが、人間生活にとって十分に恵まれているわけではない。照葉樹林帯は関東北陸の一部から南にかけてであつて、中部山岳地帯から東北北海道は落葉広葉樹を主体とした夏緑樹林帯といわれる中部ヨーロッパやアメリカ、カナダ地方と同じ植生を持つ高地性の風土であるうに、農耕には適さないとされている酸性腐植土で形成されているために、食料経済が主体であつた時代には、関東以南にくらべてその発達が遅れていた。しかしこの地域は良質の針葉樹を混じえた豊かな森林を持つため、現在でも国産材の50%を供給しているのである。

以上のように考えてくると、日本がその地域特性に応じた固有文化として、植物性の材料を使つた生活用具を中

心に発展してきたことは当然で、私達が本能的に金属の冷たさより木材の暖かさを好むのも、また住宅の空間として木材を主とした有機質の材料で囲まれることに、理由のない安らぎを感じるのも、こうした風土に生きた十数万年という長い時間が育てたものであり、多分それは異国の人々とは違う、自然という共同体の一員として参加しているという意識による感覚が潜在しているからであろう。

これが地域文化を成立させる起点であり、それが他の地域の文化と異質であればあるほど独自性の強い固有文化といえるのである。もちろん広範囲の緯度にまたがるこの列島自身も、それぞれの地域で風土環境にかなりの差があり、各地に独自の生活感覚が醸成されていることは言うまでもない。私達がこれを失うことは、日本を捨てることにもなる。

2.2 日本建築と西欧建築

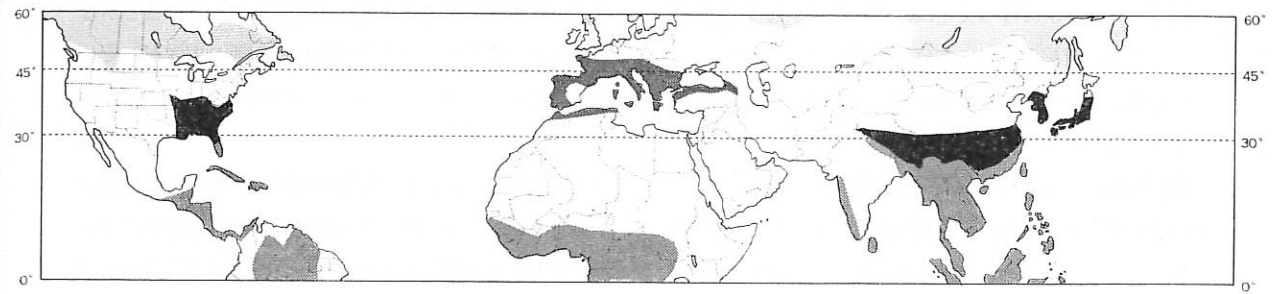
わが国と西欧では、その風土の差によつて建築に対する考え方にもかなりの違いがあるようである。

もともと原始人類にとって、ほとんど無防備の状態では自然に相対したとき、選ぶ道は二つしかなかつた。ひとつは人間の生活に適した環境を求めて、それに順応することであり、もうひとつは適当な場所が得られなければ、そこを自然の状態に抗してでも、自分達の生活しやすい環境に作り変えることである。

われわれの祖先は前者を選び、西欧人の祖先は後者を選んだことが、その後の彼我の民族的性格ひいては文化の差を生んだ。

たびたび言うように、建築はその地域の風土に根ざした生活・思想・哲学・産業・経済などさまざまな要因を総合し実体化した文化のシンボルである。古代エジプト文化はピラミッドなしでは語れないし、ギリシャ文化の全盛期を代表するのはパルテノンであり、またキリスト教文化もゴシック建築を除いて理解することはできない。

日本の建築と西欧の建築との明らかな違いは、柱と梁桁で組み上げる方法と、壁で囲つた箱を作る方法とにある。この相違は建築の技術に対する考え方を根本から異にす



暖温帯広葉樹林 照葉樹林 熱帯・亜熱帯林
硬葉樹林 亜寒帯針葉樹林
(上山編、照葉樹林文化より)

る。例えば前者の楣構造では、まず棒状の材を組み合わせた籠を作り、隙間を壁にしたり窓にしたりするが、後者の壁構造では、版で閉じられた箱に必要なに応じて出入口や明り取りのための穴をあけるのもそのひとつである。

この両者をもつと簡単に言つてしまえば、隙間を塞ぐか穴を明けるかの違いで、発想がまったく逆になる。しかも日本の場合は湿気が多い照葉樹林帯で、木目のよく通つた良質の針葉樹が豊富にあつたから、鋭利な刃物がなかつた古代には、適当な大きさに製材するのに、これを割つて使用するのが最も便利であり、こうして得られた柱目の木肌の美しさを生かし愛でるといった独特の観賞法を育てた。

これに対して、落葉広葉樹林帯が主であつたヨーロッパでは、木材は一般に材質も硬く加工しにくかつたので、使つてもそれを観賞用の化粧材にする習慣は、加工用の道具や技術が高度に発達するまでは生まれなかつたと推定してよいだろう。したがつて木材は、壁や屋根を造るための補助材としての位置しか与えられなかつたのである。壁を作ることが目的なら、わざわざ柱と梁で籠を組むよりは土や石で直接立ち上げたほうが簡単である。木を使うときも加工が面倒なら、そのまま積み上げる甲木組（アゼクラと同種）のほうが作りやすい。もちろん極寒極暑に耐えなければならないという、厳しい自然条件に対して、木より土のほうが性能がいいということもあるし、幸い日本とは逆に雨が少ないので、この点でも土は有利であつた。

紀元前4千200年ごろといわれるメソポタミヤの古代住居は土で作られていたが、前4千年ごろになると日乾レンガが使われるようになる。このころから集落や都市国家が成立したとされている。縄文時代中期に相当する。土を練つて作られた不整形な住宅から、より作業性の良いレンガを發明して幾何学的に整形の建築が作れるようになったあたりが、西欧文化形成への第1歩であつたのではないだろうか。

レンガを積んで作られる建築美は量感の迫力である。これを強調しようとすれば、多量のレンガを使つた、したがつてスケールの大きい建築を作ることであつた。次々と巨大な神殿や宮殿が、ユーフラテスの河岸に出現した。縄文時代の後期である。日本では自然石を使つたモニュメントが全国到るところに作られていた。

偉大な神々や王のためには、それにふさわしいより巨大な建築を作らなければならない。日乾レンガが石に変わり、都市や神殿は専門家によつて計画的に建設される。壁も屋根も床も道も石やレンガで覆われてしまつた人工の空間の中で人間が生活するためには、それに必要な施設がある。レンガの厚い壁で囲んだ都市に人口が集まれば、自然の恵みだけを待つてはいるわけにはいかない。牧畜が行なわれ畑が作られる。こうして自然環境は人間がすべてを支配する人工環境に変貌する。

人工環境を造成したり維持してゆくためには、これを計画し建設する技術者が不可欠の存在になる。やがて技術は西欧社会の中で重要な位置を占めてゆく……自然を征服するために。

照葉樹林のなかに育つ文化は、これとはかなり様子が違う。日常の用を足すのに十分な清流の近くの日当りのいい小高い丘の上には、栗や椎や栃の木が風が吹くと雨のように落ちるほど実を付けて茂っている。ここに浅く穴を掘って、手頃な杉か桧で簡単な架構を作り、川原に生い茂る茅を刈って束ねて屋根を葺き、床に敷き込めば、冬は小さな炬にくべた樺の小枝の燃える火で暖を取り、夏は木々の緑が落す影が強い日射を遮ってくれるし、川面を渡り林の間を抜ける風も涼しい。ただ夏の前後に来る長雨や台風は悪魔の使いのように思いがけない厄い(わざわい)を連れてくるが、それもきまつたときにしかこないから、用心さえ怠らなければ避けられないことはない。冬になると収穫が少なくて遠いところまで獲物を探しに行かなければならないので大変だが、秋の実りの多いときに準備をしておけば、かなり楽をすることはできる。

こうしたことより用心しなければならないのは、人がふえることだ。周囲の実がなる木の数には限りがある。この限度を越えて人がふえるとかならず争いになる。ふえすぎたら早目に新しい場所を探して一部を移住させなければならない。家を作るために、実のなる木を切つたり、食糧が足りないからといって降り鮎を獲つたりしては絶対にならない。

自分達が生きてゆくためには、自然のサイクルを乱してはならないのである。これさえ守つていけば平和に暮してゆけるから、こうした生きてゆくためのルールを、伝承の知識としてもまた体験的にもよく知っている長老の言うことを聞いてそのとおりに行なつていけば間違いない。

長老は尊敬され、村長(むらおさ)の下でよく統率された集団は、固い結束によつて行動した。結束を乱すことは自然の恩恵から見放されることであり、自らの死を意味した。これは採集生活をやめて米作農業が主体になると、さらに強く要求されるようになった。田を作る広い土地が見つければ、労働力は多いほどよい。採集生活のときは栄養が不安定で、赤ん坊の大半は生まれてすぐ死んだし、早老で20才を過ぎれば老人の仲間に入れられ大半は栄養失調で早死したが、米作は計画さえ上手にすれば、

一年中十分な栄養が取れ健康に不安を持つことがなくなつた。そのかわり、米が取れる土地の広さが、それ以前には考えられなかつた新しい価値を生むことになつた。

土地を支配するものが、集団の支配者であり、より広い土地を得ようとすれば、力で獲得しなければならない。かつて野獣との闘争のために作られた武器は、力と力の争いのために使われるようになった。土地を得るために。しかし広い肥沃な土地は、豊かな実りを約束した。人々は採集時代よりはるかに安定した生活が送られるようになった。支配者にとつても、生活者にとつても、必要なものは土地であつて建物ではなかつた。遠くオリエントで、より巨大な石やレンガの塊を積み上げることで、王者の権威を示そうと争つていたとき、ここでは、山あいの狭い平地から少しでも山の遠い広い平野を求めて、力の限り闘つていた。

茅や葦に覆われた草原は、そのまま耕して良田になることを知つていたし、新しい耕作法として、枯草を焼く白い煙がたなびいているところもあつた。田畑は1年でサイクルするが、樹木は再びもとのようになるのは、人間の一生と同じくらいかかることは昔からの言い伝えで長老が教えてくれるし、冬暖かく夏涼しく住むための家の作り方も、昔からのやり方で不満はなかつた。収穫を貯蔵するための建物や長者のための背の高い建物、家畜小屋などが新しく必要になつたが、古来からの植物性の材料、特に白木の香りがほのかに匂う空間の親しみは、何の疑いもなくこれらの建物も在来の工法の延長として作られた。

狩猟採集の時代から大きく変わつたのは、新しい農耕社会が、自然が与えてくれる天の恵みに全面的に依存していたかつての時代と異なり、自らの労働によつて生活する必要を生じたことである。そのために生活用具の種類もふえ、社会組織も複雑になり、以前とはくらべものにならないほど多くの施設が必要になつた。

これらを維持してゆくためには、支配者にとつてはより広い耕地とそれを耕す労働力が必要であるばかりでなく組織が消費する資材の安定した供給のために、山林の確保も重要な目標になつた。質のいい領地を多く持つこと

が首長の権威を裏付けることになつたとき、領地を拡大するために、首長と首長の間で争いが起こる。権力者の登場である。

雪に閉じこめられた冬の炬端で、濁酒を汲み交わしながら、村の古老は若者達に静かに語りかける。

「森の立木も年経れば朽ちて倒れる。川原の石でさえ長い年月には形を変える。この世で変わらないものは何ひとつない。だが倒れた木は土に帰つて森の肥になるし、あの恐ろしい洪水も死んだ土地を生き返らせてくれる。それが天地の理というものだ。これにくらべると近頃の世の中はどうだ。目先の欲だけで人が争う。お前方もこの天地の営みをよく見るがいい。ここに人が住むずつと前から山も川も森もあのままの姿でそこにあつた。これからも変わることはないだろう。ただし、利口ぶつた人間が天地の法を破らなければの話だが…」

厚く葺いた茅の壁と、柔らかい藁を敷きつめた部屋は暖かく、ほどよい酔いが眠気を誘う。

2.3 資源と技術

農耕によつて生活する人達にとつては、領主が代わることより土地を奪われるほうが恐ろしかつた。この風土に住む人達の土地への執着は、定着して採集生活を始めたときから生まれたと考えてよいだろうが、農耕生活にはいり自分の手で作物を作るようになって一層強固になつたに違いない。

支配者達にとつても、この土地とそこに附属する農民達は、彼等の貴重な財産であつた。都市国家を中心にして人工環境を造成する技術社会として発達した西欧の文化が、ものを財産としてきたのとは、この点でも文化が成立する背景を異にしている。わが国のそれが「自然文化」であるとするれば、西欧は「もの文化」と言つてよいだろう。

中国に「人が自然を荒廃させる」といつた意味の古語があるそうだが、中国に限らず、早くから文明が開けたとされているところの多くが、現在砂漠化してしまつている。北アフリカの広大なサハラ砂漠も、考古学による発掘の結果、かつて灌漑用の水路を持つた都市国家が存在

し、発見された壁画などからここは当時大森林地帯であつたことが確認されたといわれている。

西欧的もの文化は、自分達の周辺にあるものはすべて、天与の資源であり、人間の生存にとつて必要なものはことごとく利用するという考え方を基本にしている。実体として存在するものを対象として財産としての価値を認める「もの文化」社会では、ものが失われることは財産を失うことになる。より失われないものを求めて貴金属や宝石がもてはやされた。

西欧社会の過度のものへの信頼が、より巨大な建築や都市の建設をうながしたし、それは無制限な資源の消費につながり、救いようのない自然破壊を招く結果になつた。生物は群を作る、これは種族生存の本能であるといわれている。植物の場合でも群生するのが常である。このことは逆に植生に必要な一定量を欠くと、その地域の植物は生存の法則を乱して自滅することになる。サワラもこうして不毛の地となり、今日もなお人間の生存さえ許さなくなつてしまつたのである。

自然文化社会では、生きることは土地を守ることであつた。土地を守るためには、自然の法則に適應することが最良の対策であつた。土地がすべてであり、これ以上の財産は考えられなかつた。少なくとももの社会との接触があるまでは、ものへの執着はほとんどなかつたといつてよい。このことは古代墳墓の副葬品が雄弁に語っている。

わが国の建築が、明治以前まではすべてといつてよいほど木造に限られていた理由に、木材資源が豊富だつたからとする説が有力である。それもひとつの理由ではあるだろうが、木材が豊富だつたのは、前述したように古代では日本だけでなく、この緯度に相当する地球上には、大森林が到るところに繁茂していたのであつて、これだけが原因とは考えられない。

土地を失うということは、単に他人に奪い取られるだけでなく、その土地が使いものにならない死んだ土地になつてしまえば同じことである。われわれの祖先達は、自然を失うことが土地を殺してしまうことになることを長い体験で知つていた。土地を愛し自然を愛することを、家族や肉親を愛するのと同じに、或いはその大切さから

は家族以上に、考えていたのである。

竪穴住居の工法として一般に考えられているのは、中央に立てた数本の柱とそれを継ぐ梁を主構造体にして、それに周囲から榿(たるき)を寄せかけ、束にした茅や藁で葺き上げる方法で、登呂などに推定復元されているが、でき上がった形はとにかく、工法としてはおよそこんなものであつたらう。この種の建物にはいうまでもなく、すべて植物性の材料が使われている。

柱や梁の材料は、柱穴の大きさから推定してもそんなに太いものではないし、榿はもつと細かつたらうから、大木を伐つてくる必要はなかつたと思われる。大胆な推測が許されれば、これらの木材は20年位で成育するから、伊勢神宮などに残されている20年互の式年造替の制度も、意外に早くから一般の習慣として行なわれていたのかも知れない。建物を20年くらいでサイクルするようにしておけば、ほとんど自然の状態を乱さずに永久に資源を確保することができるのである。もちろん茅や藁は1年でサイクルするから、肥料にする分を除いて、3年か4年に一度葺きなおせば、資材に不足することはないし、屋根や床は傷みやすいから、その材料に生育が早く大量に得られるものを選んだのは当然であらう。

農耕生産になれば、計画的に栽培することを覚える。当然この手法は他の植物、例えば建築用材の計画的栽培にも応用できたはずである。植林とまではゆかなくても、建築材の供給と森林資源との関係を計画的に考えていたことは、やや時代は降るが、持統朝で伊勢神宮の式年造替の制をきめたとき同時に、御廂(そま)とよばれる宮域林を、殿舎造替の時の用材を確保するために、神域に含めて専有地としており、嘉元造替まで600年30回の造営をこれで賄っていることでも知ることができる。

形あるものは失われるという哲学の一方で、需要の無限性やモニュメントの永遠性を求める、現実的な人間的欲求を満たすための手段として、わが国の建築に使用される資材や技術が評価選択されたと考えてよいようである。

日乾レンガが湿潤な気候風土では使用不可能とすれば、木と草と木皮以外に、これに答えられる資源があつたらうか。それは石や金属では絶対になかつたはずである。

かつて私達の祖先が石造による建造物の技術を知らなかつたとする説があつたが、全国各地に無数に発見されている横穴式古墳は、立派な玄室とよばれる石造空間を備えている。しかしその技術が地上の建物に使われた事実は、いまのところまったく知られていない。これは多分石は地中にあつてこそ、もつとも自然のあり様であると考えていたからではないだろうか。

これに関連してアーチ構造が使われなかつたことを疑問にする人達もいるようだが、これも7世紀にはその技術がわが国に知られていたと思われるかなり確かな裏付けがあるのに、使用された痕跡も認められないのは、常に自然を師とし、最も確かなものとしての自然の状態を範としていた当時の人達にとつて、このあまりに人為的で反自然的とさえ思われる工法は、自分達の永遠性を願う墳墓の構造としてふさわしいものとはどうしても思えなかつたのではなからうか。

中国や朝鮮から新しい建築技術が導入されて以後、建物の基礎に石を使うことを覚えたが、はじめは仏殿以外にはほとんど使われなかつたのが、平安時代頃から一般の建物にも次第に普及してゆくが、その主な理由は転用性にあつたように思われる。何かの事由で建物が失われた後に残る礎石は、そのまま再建のために再用できるし、別の場所に移動して別の建物のために利用することもできた。そのために失われた歴史建造物の礎石が発見できず、正確な位置や規模の確認を困難にする例が多い。礎石はわが国の木造建築を構成する主要な材料のなかで、ほとんど唯一の土に還元しない建材であり、それゆえ長い間一般住宅には貴族の邸宅にも使われなかつたのが、非消耗であるために転用できることを発見して、資源の一方的な消費にならないところから汎用性を広げることになつたのであろう。

これに対して瓦の場合は少々違つていて、技術が導入されたのは礎石と同様6世紀末であるが、古代ではほとんど仏殿にしか使われず、中世近世では仏殿さえも椽皮や柿板、茅などの植物性葺材が多く使用され、瓦は特殊な建物にしか使われなくなつてしまつた。日本建築は瓦葺というイメージは、江戸時代にはいつて都市の火災が頻発するようになり、これを防止するために、都心部の建

物に可燃性の屋根材を使うことを禁止したことから始まる。したがつて瓦のような非還元材を建築に使うことは、自然文化人にとつてけつして好ましいことではなかつたのである。

徳川幕府が、禁令を出してまで非還元材の大量使用に踏み切つたのは、よく知られているように幕府の鎖国政策の中心であつた植林と御用林の強力な保護にあつた。森林資源の確保は、建設資材の供給をはじめ、国民生活に必要な施設道具類の需要に対する保証であつた。しかしたび重なる都市の大火がこのシステムを大きくくずしてしまう危険があつたからである。

無限の消費に対する有限の資源という課題は、けつして今日の話題などではなく、われわれにとつては遠く数千或いは数万年の昔から生存の原理として、絶えず考えられ続けてきたことなのである。それがわれわれの思考の原点から消えてしまつたのは、政策としても文化への追従を決定した明治以後のことである。

西欧的もの文化が成立するには、人為的技術の創造的自由が保証される資源の裏付けがなければならぬ。これを無批判に盲目的に受け入れることで、自然文化は破壊され、その間に生じた巨大な隙間を埋めるために、太平洋戦争という悲劇的な結末を迎えなければならなかつた。

これだけの犠牲を払いながら、現状はこの二つの文化の根本的な差異に気がついていないようにみえるのはどうしたことであろうか。確かにわが国の文化が、外来文明を受け入れながら変化してきたことは歴史上の事実である。しかし前述したように、そのすべてを盲目的に受容したわけではない。常に批判的にあるときには拒否的に体験的な試行錯誤をくり返しなが、自然文化との融合を確かめつつ消化不良にならないよう配慮してきたのである。私達はいまこそ、この古人の賢明な判断に学ぶときではないだろうか。

2.4 住宅における環境と生産のネットワーク

もの文化人は、人類が常に自然との闘争で勝利を得るために、絶え間ない技術の向上と開発を目指してきた。この実現のために、新しい技術の発見と創造は、もの文化

を進展させる原動力として高く評価された。個性は尊重され、物理的評価が客観的判断として重視される。技術や工学の発達は、産業の専門化を進めると同時に、個別産業の独自性が確立されギルド社会が生まれる。

これに対して、自然文化人は、自然との同化に生存の原理を見出そうとしていたから、判断の基準をまず環境との調和に求めた。木に竹を継いだようにならないためには、常に総合的な判断が必要であつたし、個と総合は一体のものとして意識されていた。身分社会や年功序列が社会組織の基準になつているのも、論理より経験の累積に調和の真理を見てきたからではないだろうか。

もの文化社会が分割専門化構造であるとすれば、自然文化社会はピラミッド形総合化構造であるといえる。この社会構造の本質的な違いが、ともすると西欧人が日本人に対して、軍国主義的性格を持つた危険な民族という見方をする要因になつているようである。

たしかに分割形構造では、ピラミッド形は非民主主義的な軍隊組織にしか見られないから、これをただちに軍国主義と結びつけて理解するのも止むを得ないのかも知れないが、これは文化形態の違いであつて、軍国主義とはまったく関係がないことはいうまでもない。ところが、こうした批判に対して彼等の誤解をとくために、日本も分割形に改めるべきだとする“進歩的”知識人もいるが、文化というものとはそんなに簡単に方向転換するものではないし、これまで経験したように、形だけ変えても本質を変えることはできないのだから、混乱を増すだけ無駄なことというべきだろう。

かつてヨーロッパを旅して、北欧で働いている日本人建築家に会つたとき、彼等は「仕事をやり過ぎる所員を持つ日本の建築家はうらやましい。私のところのドラフトマンは、与えられたこと以外は絶対にしない。だから私はいつも大量の仕事を家庭にまで持ち込まなければならない」と嘆いていたが、この話が分割社会とピラミッド社会の差を端的によく表わして面白かつたことを思い出す。

自然文化人は、ピラミッドの頂点に近づくほど、総合判断の範囲が広がることを本能的に知っているし、江戸時代のように身分社会が固定化してしまつたときでも、個

人の能力や適応性に対する自由は認められていた。社会構造のどの位置にあつても、出世することはピラミッドを昇ることである。

そのために最大の努力をするのがピラミッド社会の特徴であろう。

これに対して分割形社会は個別専門化が基本なので、職能の完成度に優劣はあつても、身分階級の上と仕事の内容とは直接の関係はない。この具体的なあらわれが前記のような現象になるわけで、そのうえ体質的に分割社会の慣習になれない日本人が、これを上手に処理する能力を欠いているとしても当然であろう。

その地域の文化は、数万年という長い時間を経て成立したものであつて、それは地域住民の性格として完全に消化されている。したがつて日本人のように限られた地域に定着した同一民族の間では、その文化的特性が暗黙のうちの了解事項として処理されてしまうことが多い。

自然文化人が、総合的判断能力に社会的評価の基準を置いていることは前述したが、これは社会組織にもいろいろな形で具現化されている。わが国の建築生産組織もその代表的な例のひとつであろう。よく知られているように、一般的な形として、大工、左官、建具、石工、瓦工、鋳工など、それぞれ独立した職能に分かれ、専門分化が確立されているので、一見分割形に思えるが、実際はこれを総合し組織化して建物を作っているのは、棟梁または工務店であつて、個別の職人が直接仕事を受けることは、一般にはほとんどない。

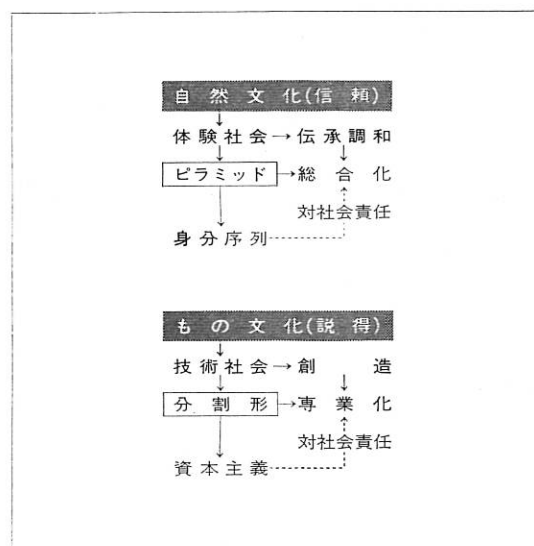
最近とはにかく、以前はこうした組織の長である親方を越えて下職が仕事を施主から直接受けることは、厳しく禁じられていた。現在でも一般に家を建てる人達の間では、建てた家が雨漏りすれば、それは屋根職の責任である以前に棟梁または工務店の責任であると考えてるのが常識であろう。さらにその状態は屋根が悪いというより建物全体が不完全だと判断する人達も多いに違いない。

これを不合理とか非科学的と受け取るのはもの文化人的思考であり、当然のこととするのは自然文化人的理解である。いずれが可であるとか否であるという批判はできないが、わが国の建築生産組織が請負制で成り立っている現状を前提とすれば、この制度が自然文化の特性のひ

とつであるピラミッド形の典型である以上、作られた建物のどの部分にある欠陥も、すべて総合請負者の責任であるとするのが妥当である。

住宅産業界の質的低下が問題にされる現状の要因に、この自然文化社会へのもの文化の混入があげられる。もともと自然文化社会がピラミッド形をとつたのは、自然界をはじめ自然の一部である人間社会も、そこに起こるさまざまな現象には人知をもつて予測できない多様な状況が表われる。これを少しでも広く予測の誤りを少なくするためには、それだけ多くのことを体験し、総合的判断のもとにプロセスのコントロールを充分に果せる能力を持つた人に、そのシステム全体の責任を持たせることが最善の方法であるとしたからである。

ところが実状は、このピラミッド形に対して分割社会で発達した資本主義が導入され、実質的には必要な判断能力を持たないでも、資本力があれば総合責任になれるうえに、ピラミッド形の体験技能を経験しない職能集団が、形だけは専門化されてこれに付属するという、最悪の組織形態になつてしまつたことや、さらにもの文化の特性である技術中心の産業専門化に伴う創造的開発行為によつて、次々に新製品が市場に送り込まれた結果、これが技能体験の体系を一層混乱させることになり、分割形を肯定しながら意識のうえで総合判断をタテマエと



する自然文化人にとつて、納得できない状況を作りだしてしまつたのである。

わが国の自然文化は、数万年という長い間単一民族が、異民族との人種的な交流や支配を受けないで（これには異説があるが、本質的な影響はなかつたと考えて）、ひとつの文化形態を維持してきたこともあつて、意志伝達に暗黙の了解を前提にした、相互信頼を成立させ、沈黙が美德とさえいわれていたが、もの文化はこれとは逆に、異民族間の交流、闘争、支配の、絶え間ない激動のなかで成立したこともあつて、意志を伝えるのに相手を論理的に納得させる説得法が育てられ、これが西欧的理論科学を発達させたといえる。

この信頼と説得の違いが、今日の国際社会でいろいろなトラブルを生む原因になつているようであるが、国内でも、もの文化の導入によつて、暗黙の了解の基盤であつた文化的コンセンサスがくずれ、かならずしも沈黙が美德ではなくなつてきている。

住宅建築が国民の日常生活を支える重要な施設であることは言うまでもない。そのために全国に30万を越える建設業が存在するわけだが、これらは年間150万戸の新築住宅を賄うだけでなく、日常的な住宅の保守整備を維持するためにも重要な役割りを果しているはずである。しかし数のうえでは充分であるように見えるこの組織が、実状ではかならずしも円滑に機能しているとはいえないようである。

この原因には、先述した社会構造の混乱のほかに、かつて住宅が、その地域の人の手で建てられていたときには、発注者と建設者の間には生活文化に対する共通のコンセンサスがあり、信頼形の伝達形式で充分であつた。ところが供給側である建設者が一方的にも文化形式を取り

入れたため、発注者の自然文化意識との間に以前のようなコンセンサスが得られなくなつたし、こうした状態は発注者と建設業者の間だけでなく、住宅生産組織の内部でも同様に混乱が起こつているためである。

組織は資本主義分割構造をとりながら、意識はピラミッド総合化構造に依存するという矛盾が、組織内部の相互信頼を失ない、人間関係を崩壊させて、資本への依存度を高めるといふ結果になつた。これが資本集中化政策と相まつて増幅され、地方弱小請負業はますます矮小化せざるを得ない状態に追い込まれている。

自然文化が作り上げた住宅生産のネットワークは、相互信頼を基礎にしたピラミッド形総合責任体制であつた。いつの場合でも組織は目的に従い柔軟に運営される。したがつて総合責任を負う立場にある者は、その組織の末端まで注意を行き届かせていなければならなかつたし、地域社会ではどんな組織に所属している人達でも、個々には地域の住民であつて、地域の生活者としての責任も負わなければならなかつた。

このことは住民全体の暗黙の了解事項でもあつたから、それだけ人間的な相互信頼が大切にされ、ときには数世代にわたる人間関係の持続が当然のこととして受けとられていた。

建築の技術がきわめて保守的な性格を持つているのは、こうしたピラミッドの上位にある総合責任者の負わされている立場が、単に建築を作る技術にとどまらず、地域の生活環境全体の調和を乱さないことに対する住民の信頼を背景にしていたからであり、この信頼関係がくずれることは、地域文化ひいては自然文化が破壊することでもある。

(筆者・武蔵工業大学教授)